



山本作兵衛展 東京タワー1F 特設会場

2013年3月16日～5月6日

3/31 記

明治日本産業変遷に呑まれたプロレタリアの悲劇。蒸気機関車の普及で、川舟船頭だった父が職を失ったため、作兵衛一家は生きるために炭坑生活に入った。命をつなぐ生活の道を失った人々の最後の砦となったのは死と隣り合せの炭坑生活。黒いダイヤと呼ばれた石炭は当時の日本の重要なエネルギーであったが、山を掘る人々は命がけだった。男ばかりでなく、女・子供も炭坑に入り働いた。その炭坑での壮絶な生活を水彩画と文章で綴ったのが本展である。

山本作兵衛は明治25(1892)年、福岡県嘉穂郡に生まれた。7歳頃から坑内に入って以来50年、築豊の山に生き抜いた記録を孫たちに残そうと絵筆をとった。炭坑生活者の中には文字を書けない者もいる。だが幸いに教育を受けられ、類いまれなる記憶力を持った作兵衛は、日記やメモを基に明治から昭和にわたる炭坑の記録を残した。嘘が大嫌いな作兵衛が描いたたった一つ嘘。それは「実際の炭坑の中は暗くて絵ほど鮮やかではなかった」ということだった。



誰もがアクセス可能な人類の歴史資料保存目的で設立されたユネスコ「世界記憶遺産」戦後、植民地にもならず、国外経済支援も受けなかった西洋以外の類いまれなる国ニッポンの初登録。画文集「炭坑ヤマに生きる」(講談社)あり。